

論文の内容の要旨

氏名：安住文子

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）

論文題名：感覚への気づきを通した身体の学びの構造に関する研究

本研究は、感覚への気づきを通した身体の学びの構造について解明し、動きの学びを支援する指導の在り方へ寄与する知見を得ることを目的とした。

第1章では、本研究の背景として、スポーツおよび健康といった、身体の動きの学びにおいて、目に見えない動作感覚や運動感覚といった感覚への気づきに注目したアプローチの重要性から本研究の意義を見出した。次に、「熟達」、「感覚を通した学び」および「関係性における学び」に関する先行研究を概観し、それぞれの関連性を含めた研究動向を示した。そこから、熟達過程における詳細や、学習者の感覚に焦点を当てた学びの詳細、および学習者と学習者をとりまく環境との相互作用を通した学びの詳細を明らかにする意義を見出した。これらの研究動向と課題を踏まえ、本研究の目的を「感覚への気づきを通した身体の学びの構造について解明し、動きの学びを支援する指導の在り方へ寄与する知見を得ること」と設定し、社会構成主義の認識論的枠組みに立って考究することとした。本目的を達成するために、Ⅰ．熟達初期における学びの構造、Ⅱ．熟達成熟期における学びの構造、Ⅲ．熟達者が熟達体験から捉えた学びの過程、を明らかにする3つの研究課題を設定した。各研究課題では、それぞれの熟達段階における感覚的な気づきについて豊富に語ることでできる対象者と学びの場面を選択した。研究課題Ⅰの熟達過程初期の段階では、非日常的な環境で実施する点および、恐怖、不安、操作感といった、広い意味で感覚の素材が抱負な運動である点から、スキーを選択した。また、メタ認知能力に基づく振り返りを通した自己分析による記述が期待できる大学生を対象とした。研究課題ⅡおよびⅢにおける熟達過程の成熟期では、個人内の気づきや感覚について、豊富な語りを期待でき、自己の内面に加え、他者との関係性を含めた複雑な感覚、読み、駆け引きなどの目に見えない現象に関する感覚を有するという点で、剣道の熟達者を対象に設定した。

第2章では、研究課題Ⅰとして、熟達過程の初期段階における相互作用を通した学びの構造について検討した。本調査では、スキー初学大学生を対象とし、短期集中授業の学習過程における熟達体験から、解明することを目的とした。対象者の振り返り記述による内省報告に基づくSCATの質的分析法による分析の結果、初学大学生の熟達体験は、「学びに付随する戸惑いと不安」「学習方略に基づく学びを通した気づきと体感」「学びを支援し促進する学習環境を求める気持ち」「学びを通した喜びの体感」の4つの要素に分類され、それぞれの要素の循環的な関係性の中で説明される点が明らかとなった。慣れない環境における新たな学びにおいて、対象者が学習の初期に強く生じていた、戸惑いや不安感、恐怖感は、学習が進むにつれて、克服するあるいは回避する課題から、徐々に肯定的な学びの契機として位置づけられていった。その結果、上達の実感やそれに付随する快体験を学習初期に実感することで動機づけが高まり、さらなる学びを求める姿勢、熟達を目指す取り組みとして示された。すなわち、初学者の熟達体験は、戸惑いや不安が、学習方略を用いた学びの中で、様々な気づきを得、らせん状の熟達過程を経る中で、喜びや自己成長の実感につながる循環的な構造をもつ点が明らかとなった。

第3章では、熟達過程の成熟段階における相互作用を通した学びの構造について検討した。本調査では、剣道八段および数多くの競技実績や指導経験を有する熟達者を対象として、読みや心理的駆け引きといった不可視な事象を含めた、熟達者のもつ感覚的かつ内省的な経験に焦点を当てた。そこでは、半構造的、自由回答的、深層的インタビューおよび刺激再生法により、試合場面において、①読みや心理的駆け引きがどのように機能し、②実際の動作とどのように融合させているのかを調査した。分析の結果、剣道熟練者の読みは、自分と相手に対峙する関係性の中に置き、情報のやり取りの場における戦術的な予測や判断力といった作用として捉えるのではなく、むしろ自他を同期させる操作的な体験として位置づけることの重要性を示唆するものであると考えられた。さらに、相手を巻き込んだ協同性と同時に、多層的な読みの構造も重要な要素であるという興味深い点が示された。以上の読みを踏まえた剣道における心理的駆け引きは、実際の試合場面において、対戦相手を自身の読み通りに読ませ、動かし、攻めるための前提を構築し、対戦相手との読み合いを通して相手の隙をつくり、相手を動かし、相手の読みの先を読み切った上で

攻めを実行するといった一連の流れによって構成されている点が明らかとなった。さらに熟達者の心理的駆け引きは、情報操作と誘導といった内容に留まらず、相手との共同性の中で展開される、複雑で相互的なかわりの意味を含んでいると推察され、「対戦状況において、対戦相手を読み切り、相手の判断・行動を自分に有利になるように誘導した上で、攻めの動作に動かし、打突の機会に攻めること」といった構造持つ点が新たに示された。

第4章では、熟達者の熟達体験から捉えた学びの過程について検討した。初学者から熟達成熟期に至るまでの体験を捉える調査として、剣道八段の熟達者を対象とし、学び始めてから今日に至るまで、どのような経験を経て熟達を果たしたのかを明らかにすることを目的とした。調査は、対話形式インタビューを用い対象者の語るライフストーリー法を採用した。分析の結果、対象者の熟達化には、「幼少期の印象深い剣道体験」および「探究的な稽古の体験」の2点を共通要素として導き出した。すなわち、剣道の熟達者には、幼少期における多様な形で体験される快体験および自我の萌芽形成が、楽しさの実感として体験されている点が推察された。また、探求的な目標を追求し続ける稽古の環境により、さらなる技能向上を求めた稽古に没入していった点も推察された。そうした環境の中で周囲との相互関係を通し、自身の剣道を振り返りながら、考える稽古を積み重ねていったことが明らかとなった。さらに、剣道の熟達に対する価値観においては、剣士としての熟達、および指導者としての熟達の2軸が同時並行して存在するという新たな視点を含むものであると考えられた。

第5章では、感覚への気づきを通した学びの構造についてモデルを示した。学びが生起する場には、環境および他者を巻き込んだ相互作用が存在している。その中で、熟達初期の「快体験」および「印象深い体験」、熟達が進行した段階の「自他を取り巻く環境との相互作用体験」、さらに進行した段階の「自他の感覚を取り込んだ相互作用体験」といった、それぞれの学びに応じた体験と、「探索的目標設定」および「目標を追求し続ける環境」がつながり、熟達段階に応じて「deliberate play」「deliberate practice」および「deliberate practiceの深化」によって学びの体験が展開され、感覚への気づきが深まっていく構造を示した。以上のことから、感覚への気づきは、熟達段階に応じた深化がなされ、自己内コミュニケーションのみならず、状況に埋め込まれた活動を通して、自己をとりまく周囲の環境および他者の意図や感覚までも取り込みながら、身体の学びを進化させていくことが重要である点が明らかとなった。熟達段階に応じた感覚への気づきを通した学びの構造が、熟達過程の中で位置づけられている点が本研究によって明らかとなった。

第6章では、結論として、本研究の成果と今後の課題について述べた。本研究では、感覚への気づきを通した身体の学びの構造を質的研究により明らかにし、以下に示す点が新たな知見として見出された。

まず第1に、初学者の学びにおいて、学びの初期に生じる戸惑いや不安感は、学びの深まりに応じて、克服するあるいは回避する課題から、徐々に肯定的な学びの契機として位置づけられる点が明らかとなった。第2に、熟達者の学びの様相は、自他を同期させる操作的な体験として位置づけることが重要である点が明らかとなった。それは、学びの対象を見極め、予測し、潜入し、自他の動きの流れを方向付け、文脈を組み立て、必然性を帯びた動きが自然に発生する、という一連の流れの中に成立している学びの構造である。学びの対象を、自身から切り離された分析対象としての他者の構造として捉えるのではなく、自身が潜入し、動きを誘導し、多層的な読みによって成立する場の構築といった捉え方が重要である点が示された。第3に、こうした感覚への気づきを通した学びは、探求的な目標を追求し続ける練習環境の中で、自他を含めた周囲との相互関係を通し、自身を振り返りながら、学びの方策を工夫し、考え、没入し続けていく構造が明らかとなった。

本研究の限界といくつかの残された課題も存在する。第1に、本研究では感覚への気づきに焦点を当てるため、対象者の内的世界に潜入する手法を用いたことから質的研究方法を採用している。したがって、内面の視点から分析した解釈が本研究の特徴でもあり、またある意味で限界を示している。今後、多角的な視点による検討を行うことで、事象をより深く理解することが可能になると考えられる。第2に、対象者数および対象となる競技種目が限定されたものとなっている。対象者選定理由および基準を設定し、方法論的な検討も十分なされた上で実施しており、それら自体の学術的意義は認められるものの、多様な競技や対象者を対象とした考究や、より多様性をもった方法論を用いた研究の蓄積も必要であると考えられる。